

在特会の論理（24）

——労組専従から右旋回したX氏の場合——

樋口直人

徳島大学総合科学部

Logics of Zaitokukai Activists (24)

The Case of Ms. X

HIGUCHI Naoto

University of Tokushima

1. 経緯

本稿は、2012年1月29日に在日特権を許さない市民の会（在特会）の活動家であるX氏（40代女性）に対して実施した聞き取りを、意味が伝わりやすいように適宜並べ替えて再構成したものである¹。彼女は、2009年に在特会に入会、現在は支部運営となってさまざまな行事を組織する側となった。以下では、X氏の言葉をそのまま用いて活動家としての経歴をたどっていき

2. 政治に対する関心

（20歳の時には）ないような気がしますね。まったくなかったです。最初はなかったんですよ。（選挙には）行ってました。棄権したことは

ないと思いますね。これは権利だからちゃんとね、権利であり義務であるから私はちゃんとやらないといけないぞと。その一票のどうこうがあるんですけど、それが何の役に立つかとあるかもしれませんがね、行かなきゃいけない。それは日本人の真面目なところと言っていいと思います。そんなのは、さぼっちゃいけないという感じですね。学校もさぼっちゃいけないというのと同じなんで、行かなきゃいけないみたいなどころとつながっているものがあります、そこら辺は。ただある意味惰性で行っているというところがあります。（その時組合には）入ってないですね。大学行ってるんで、学校出て、会社入ったのが23（歳）ですけど、1年間予備校行ってるんでちょっと遅いんですね。

（投票先は）どうしてたんですかね。親がね——うちは市役所なんですけど——公務員だったんで。「自民党はお金持ちのための政党だから、そうじゃないところに入れなさい」。「ああそうなんだ、ふーん」という感じです。そうなのかと。自民党は金持ちのためにしか仕事をしない人だった、と私は思っていた。知らないから、勉強してないから。（自民には）入れてないですね。何党だろう。社会党かな。社会党とかも、前は多分そうだと思う。それに民社党にも絶対に入れてないと思う。親が自治労ですからね、自治労が応援しているところに入れます。

そういう指示があったわけではなくて、唯々諾々

¹ 徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 (higuchinaoto@yahoo.co.jp)。これまでのまとめとして、樋口（2012a, 2012b, 2012c, 2012d, 2012e, 2012f, 2012g, 2012h, 2012i, 2013a, 2013b）を参照。これらはまとめて、樋口（2014）の資料編として位置づけられる。本稿も含む一連のまとめでは、聞き取りの中で発せられた差別的な言葉や見方をそのまま掲載している。資料としての意味を損ねないゆえのことであるが、それが苦渋の選択であることはご理解いただきたい。

というか、日々そのように流れるがままに。流されていたというより流れるがままにたぶん、そう行っていたのだと思います。あんまりそういうことに対して、きっちり思想のあるようなタイプではないです。親は今でも私が何か活動していると言うと、そういう考え方はやめなさいと言います。今でも。だからあまり言いません。ただ最近に関しては、韓流ね、なぜだめかという、ああいうテレビばかりじゃ面白くないよね、もうちょっと考えた方がいいよねという話とかはしますけどね。生活保護とかよその国に来てもらっているよという話をすると、とんでもないねとはいいます。だからといって、別に母親はそんなに過激なことしないでよと言われます。過激なことしてないんですけど、そんなに。母、父にとっては過激な行動だっている風に見える、理解をされているみたいです。断片はわかって、全体的にそうだそうだという感じではないみたいです。父は口聞かないです。話しません。母には女子同士でお互いこうあるじゃないですか、ああいう感覚で日々のドラマの話だったりとか、やりとりの中でちょこちょこことしゃべって。父とは改まってしまって。

（政治に対する）関心がなかったのと、それ（投票に行き始めたの）と同じくらいなんです。なかったといったのは、若い頃、学生の頃です。目覚めたというか、言い方でいいかもしれませんが、そのタイミングと政治的なことに自分が目を向けていなければいけないということが、一緒くらい、大体、同じような感じでそこら辺の飛躍というか。自分の中では同じ歩みの感じですね。イメージは。

（政治に対しては、参加している団体の）気功の話だったりとか、教わってきた先輩とか先生が、政治の問題くらいはちゃんと興味持って考えなさいよといわれてから、ああそうか知っとかなきゃいけないんだ、やらなきゃいけないという気持ちを持つと思って、それから目を向けるようになったというのが事実ですね。自らという感じではないけど、やり始めるとそうしたら私たちが自分のことをあまりに考えすぎている、目の前に起きているそれこそ日々のテレビドラマのことだったり・・・、そうじゃないだ

ろうという風に思い始めたんですね。そういう意識をしたら。そこらへんぐらいから、物事に対してちゃんと自分の言葉なのに、誰かに投げたまんまはおかしいよねという。日本の社会変わらないと、あまりそういう自分は平和を守るといえることは言わないし。自分たちの生活を、たとえば九条みたいなことを含めて、平和を黙って待っている。戦争はないみたいな感じがあるじゃないですか。本来は平和だったりそういう勝ち取るべきものがあると今は思いますね。そのときは、平和平和平和って唱えてれば平和は来るみたいに思っていたというよりも、そういう意識すらないですよ。そんなものだと思ってもないし。なんかこう、普通にあるものだから、お水とか空気とかと同じで普通にあるから。あまり考えるものじゃない。日々、隣で銃声が聞こえとか、隣の人が死んだということがあられるわけではないので。まったくそういう恐ろしい思いもせずに、普通に何も考えないでしてたという感じですよ。

平和に関しては、たとえばむしろ学校の教育のなかでは、平和は大事、戦争はいけないと教えますが、平和を守らなきゃみたいな、本当に左翼的な発想でしかなかったんですね。うまく言えないけど、そんな感じですよ。だから日本人はひどいことしたという風に言われるけど、それはずっと信じていたというか、そんなものなんだろうと。けどどこかでおかしいなあ、そうなのかなあと、という茫漠とした不安感みたいなのが、根無し草みたいな感じというんですかね。私たちは悪いことをしてきたんだ、みたいな。何か。特に日本人として、自分の誇りみたいなものがまったくなかった状況でいた。そうじゃないんだと気がついた後でわかったんです。それまで、ふわふわした何ともしれない得体の知れないこの感覚、これは誇りを持ってない自分に自信というか、よってたつところがなかったからふわふわしてたんだなと思うんですよ。

（その後の）投票先ねえ、変わっているだろう、どこかが変わってますよね、組合やっていた時はね、組合のこと聞いてましたよ。頭悪いから。選挙活動行ってましたからね、お手伝いして。悪い気はなかったですよ。みんながみんな悪い人じゃないし。議員さんいろいろ。今度法務大臣になった小川さんのこととか、ここも応援しました。別に事務所には入

ってないけど、入れようと思って入れたかなあ。そういう投票行動に推薦するようなことしてると思います。

はっきりとは覚えてないんですけど、(投票行動を変えたのは)そこら辺(組合をやめたの)がきっかけ。誰も教えてくれないので。ちょっとおかしいぞというのが、結局自分で考えて。(投票先は)むしろ自民党じゃないですか。あとはねえ、わからない時は若い人。可能性がある。今はインターネットがよく使えるのでいいんですけど、そうじゃない時はわかんないから。たとえば書いてあったりすることを読んで、何か自分にちょっとでも合いそうだったりするのを見て、じゃあこの人にしようと思ってたと思います。詳しく聞きに行ったりとか、手伝いに行ったりとかはしてないです。そういうことはしてないけど、一応考えてやってみました。

3. 外国人との接点

ないです。まったくないです。(身近に)いないですね。中学校高校といた1つ上の先輩が、中学校の時には日本人だったんですけど——要するに通名ですね——高校に入ったら名前を変えられて。え、なんで?まったく知らないのに、それも本当に「ああそういうことなんだ」って気がつくまでには、ずっとおかしいなとか何だろうとかなくて、普通にああ名前変わったんだなど、普通に受け入れてた感じで。「あの人なんか人なんだ、ああそうなんだ」って思わずに接して、色眼鏡も何もなくていいところもあって。在日の方って結構多いですね。色眼鏡を持ってとかってよく話があると思うんですが、わたしはぜんぜんないですね。だからそれに対してはまったく抵抗もないし、そういうものだという風には認識もなかったですね。ただ、学校の授業とかでは習って、エタ非人とか言われてますけど。それは遠い話というか、自分の生活に何も関係ないものだという風に、何かそういうところだと思って話を聞いてましたね。直接関係ある——日々の生活と関係あることとかぜんぜん思ってたので、そのことと在特会に入ることとはまったく関係ないですね。

地元は在日も多いと思うのですが、私は残念

ながらというか幸いながらというか、在日だからといってお目にかからず怖いこともなく。飲み屋のところで一度だけ見たことがありますけどね、そんなにないです。今も危ないみたいですけどね、刺されたとかあるんですけど、そんなのはまったくないようなところで、そういう中で普通に暮らしてきたんですよね。

4. 『戦争論』との出会い

どっか私の中では日本の文化と日本語がすごく大好きで、そのことといいものだなと思ってたこと、それは小さい頃から日本語が好きだった、言葉というのが好きだったので、すごい色んな表現だったりが好きで。だから日本語が好き、日本の文化も好き、だけど日本人は悪いことした。それがものすごいアンビバレントで離れていて。だからそれがあたしの中では合致しないんです。だけど、どこかで日本人は悪いんじゃないかなと思ってるんです。それを確認できることがないので、確認したのはあれですね、小林よしのりの『戦争論』ですね。

あれを読んだ時に、日本人は悪くない、正しいことをしてきたんだ。——そうじゃないことももちろんありますよ。戦争がいいかというそうではない。だからといって、全体を否定することはない。日本人だけが悪いわけじゃないと落ち着いて。あの本を読んでやっぱりそうだったんだ、あたしが信じていた日本人は悪いものではなかったし、あたし自身が信じている何かは正しかったんだと(腑に)落ちた時に、なんか据わりの悪いスイートスポットが見つけれなかったところに、やっと落ち着いたという感じ。それがですね、二十歳ちょっと過ぎくらいかな、中にあるんですよね。ああ、やはり日本人は悪い民族ではないというのは、そこらへんから芽生えているんです。だからといって、それを行動につながっているかという、つながってはないんですよ。結果的に。つながってなかったけれど、潜在的には持っていたときという風に思っています。

(『戦争論』に関心を持った理由は)何だったんだろう。ああ、あのちょっとよくわかりませんが、私、そういう意味ではねえ、ものすごい変に真面目なんです。そういうところで小学校から中学校、平和教育、どこでもあるんですね。日教組として進めて、戦争で日本人は悪いことした、第二次世界大戦。

そういう悲惨なことは、ちゃんと見ておかなければいけないと、ずっと思ってたんです。だから小学校の時とかに、ひめゆりの話とか、ああいう戦争のこと結構一生懸命読んでたんです。絵本ですとか。ああいうのを一生懸命読みましたよ。悲惨な状況は知っておかなければいけない、731部隊の話とか読めといわれて、三光作戦とかああいうのを全部読めと言われて、残虐ないろんな写真があるやつとか読んでます、結構。そういうところに対しては、知っておかなければならない。知りたいじゃなく、知っておかなければならないという義務感でずっと読んでたんですよね。だから、それとつながっているかもしれない。

戦争論で書いてあるものに対して、ちゃんと読まなきゃいけないというのがあったのかもしれない。その前からもしかすると、社会的なことに興味を持たなきゃいけないと思って、あの人、ゴーマニズム宣言書いていた人、サリンとかの話も書いていたのかな。ああいうのから読んでいたんで、そのつながりで読んでいるのかもしれないです。『SPA!』だったかな、『SAPIO』に変わったのいつだろう。あのあたりずっと、どこかから読み始めたんです。マンガだから入りやすいと思って読んでいた気がします。ものすごい字が多いですね。ほとんどマンガとはいえない。

なんかねえ、『Playboy』とかも読んでましたね。あれも結構社会的なことがありますね。あれね、多分ね、その時にね、付き合っていた男の人がいて、その人とご飯食べに行ったりすると、おいてあるじゃないですか、雑誌って。読むのがないからその人と話して読んでたような気がしますね。そういうところに行って読んでいた、記事になっているところ、エッチな写真じゃないところを、まあそれを見たとはいえないんですけど、そうじゃないところを軽い読み物としてちょっと読んでたりとかしてた気がします。あんまりそういうのに対して抵抗がないし。女兄弟がいると違うでしょうが、私は一人っ子なので、あんまりそういうこれはあだとか、こうだとかはなかったですね。少女雑誌とか読まないの。だからそれは何度か買ったと思

ます、『Playboy』とか。ただ、あまりなんか抵抗なく普通に雑誌を立ち読みとか、ありますね。だからあまり抵抗ない。そこら辺からですね。何となく。

5. 組合専従として／自己啓発セミナーで

普通のサラリーマンというか、まあサラリーマンでいいですよ、やってたんですけど。普通にサラリーマンだったんですが、会社の労働組合の書記局というところにいました。結局、どちらかというところ左翼的なところですね。労働問題を扱って、賃金上げろ、日本でも連合とかやっていますよね。そちらの方におりまして。普通にそれを、そんなもんだと思っていましたし。会社自体が一度ストライキを起こしていますし。いた時ですね、私が。

会社がですね、半導体とかああいうの作っていたり、そういう電子部品を作っている会社だったんですね。全国展開でやってたんで、組合でいえば支部という感じで工場とか支社が北は秋田から南は九州まで。あとは関係会社が各アジア、なかにはアメリカもあったのかな。営業拠点だと思えますけど、生産拠点はアメリカとかアジアもありましたんでね。マレーシアだったりとか、中国もそうだし、そういう感じのところでした。

なので、結局、山形かなんかの工場をつぶすのつぶさないのということになって、結局どうするんだ、雇用を守るのか守らないのかというところで。どちらかというところ本来は保守系の労働組合だったんですね。保守系とか私はあまりよくわからなかったんですけど、後になって今考えたらあれは実はそうだったらしい。元いた人たちもどちらかというところ、もうちょっと保守的な感じでもありました。でも連合ですからね、やはりどちらかというところ左翼的な匂いのするのは否めない状況にはなっていましたよね。最終的に。

専従でやってたんで、ちょうど私が入ったのは男女雇用機会均等法ですが、あのあたりで、女子のことやったらどうえすかって。男女差別とか男女共同参画何とかとかいうあの手の問題を担当して、そういう意識があったのでやってたんです。そういう意味では左翼系の労働活動家だったということですね。こっちでもあっちでも活動家だったということ、私自身は。社会的なことに意識持たなきゃいけないという気持ちは、ずっとあったし。それでベク

トルがあっちに向いたのかこっちに向いたのか、ということだと思ってもらえばいいです。

ただ、だからといって組合にいてね、それを威張って言うような関係ではないんですね。だから私は自分で、当時は国粹主義者だという風に言っていましたよ、自分で。そういう人じゃない人を売国奴とか言っていましたよ、当時。頻繁には言わないけど、そういう感覚はありましたよ。自分の中で日本が好きだというのをかっちり持ってましたけど、外には口にできない。そういうことに対しては、ストレスが多いというか。

(変化したきっかけは) いろいろ教えてくださった先生たちがよかったですね。学校ではないところでいろいろ教わっていたので。その時にそこで教わっていることが、「今、男女共同参画社会で女が権利ばかり主張することがおかしいんじゃないか。あなたたちは権利じゃなくて義務を遂行しているのか」と言われたりとかしてたんですよ。そうすると、「確かにね」というところに立ち戻れるようなことを問いかけることが多かったんですね。

うまくいえないんですよ。宗教的なイメージというか、宗教団体と行ってしまうと大げさなんですけど、人生——精神修養の訓練みたいな。だから気功とか同じなんですけど、そういういろいろなことを教えてくれるところがあったので。そこで教わったことですね。いろんなことを教わった時に、自分で学び取っていたというよりも、教わって気がついていったという、目覚めていったという感じですね。

(通ったきっかけは) どちらかという、自分を変えたいとか、そういう何て言うんですか、セミナーみたいな感じ、そんな感じです。自己啓発のセミナーみたいな感じの団体です。自分を変えたいとかあるじゃないですか、自分の性格を変えたい、このままじゃいけない。そこらへんからですよ。どちらかという。そこで教わったことが、この団体自体があたしには非常に合っていたというよりも、正しい——自分は偉そうに言うてはいけないんですけど——正しく導いてもらった気がします。自己啓発の団体と言うと怪しい感じに聞こえるので、宗教とい

うのも非常に怪しい……説明がしにくいですが、そこら辺は。まあ団体で。今でもちょこちょこ、あまり行かないんですけど、最近。ありますよ。そういう感じ。

(価値を見いだしたのは) なんでしょう。じっくりくるからじゃないですか、自分に。うーん。やっぱり簡単にいえばはまったという感じですね。じっくり来るという感覚、いろいろな物事にあたしは最近びったり来ると、それを自分の中で基準にしようと思ってるんですね。たとえば日本人としてとか、日本の文化を守ろうとか、それ以外——むしろ逆にね、男女平等だったりとか。自分の中に何かわからないんですけど、何かしっくりこない。たとえば今も女系天皇の話があって、女系宮家を作るとか、何か据わりが悪い感じです。なんでそういう今までなかったことをやろうとしているんだろう、何か据わりが悪い感じというのは何かおかしいんだろうと、私は信じるようにしています。日本の文化が好きなのに、日本人はなんでこんなことしておかしい。ずっと据わりが悪かったのが、私の中でびたつとはまったのは、そうではないよという、その感覚。「ああこれこれ、これよね」って、すぽとはまる感じなんですよ。男女平等、男女共同参画とかいうと、何かそれに対していろんな講釈がつくんですよ。何か据わりが悪い。で、家族が大事とかいうね、そういう形になった時にこれがすっきりする、じっくりくるという感じなんです。それに従っているだけですよ。

教わっていることも、自分の耳が痛いかもしれないけども、自分を鍛えるというんですか、他人を先に自分を後にできるようにしたいなということですね。「自分が自分が」っていくんですよ、それはそれで。あれが食べたいとか、あれがやりたいとかでいくんですけど、(自分を後に) できるのにしたいなという思いがあるから、そういうことを教わる意味がある。自分が、ダメな自分をもうちよつと何とか良くなろう、良くしたいという気持ちが、そこら辺とつながっている。今日本を何とかね、守りたいって。自分のことは後、人のことの先にしたいという気持ちが、それでありたいというのが一番今は大きいかなあ。難しいな、そんなに偉そうなことじゃないのになと思いつながら言っているんですけど、そういう気持ちはありますね。気持ちとしては。だから何か自分が先ではなく、国のために何ができる

かとか、何かのために何ができるとか、言われるようにしたいと。そういう感じ。話が大ききになりますけどね。気持ちはどこかでそういうつもりは持っていようと思っています。

今でもそれ（団体への参加）は一応継続はしています。頻繁には行きませんが。最近ずっと放ったらかしなんですけど。心を改めてというか。心して生きよう思いますよ本当に。それはね、それはそれで本当に。

（『戦争論』より）啓発（セミナーに通ったのが）が先だと思いますね。そうですね、啓発の方が先ですね。そこで教わりながらなるほどと思って、そこからもうちょっとそういうものに意識がいつているので、見る世界が変わりますよね。そうすると。教わることで自分が見る世界が。その部分によって、変わってきた部分があると思いますね。

組合にいたのは——30（歳）の時にこっち来て（引っ越して）いるんですね。4年くらいいました。だから男女共同参画云々とかが、あたしに合わないということですね。説明ができないんですよ、組合員に。ああじゃこうじゃと言って。もっともらしいことがいなくて。自分が大事なことじゃなくて、それを人に説明するほどの説得力がなくなってきたんですよ。それで辛くなってしまって。本当は仕事に戻ればよかったのに、そのままやめちゃったんですよ、結局は。そこからですよ。感覚としては解放されたものがありますよね。やっぱりあれ、おかしかったよね、みたいな感じになってますよね。その時は。

6. 北京五輪聖火リレーのインパクト

あたしが活動始めた一番最初は、まずいなあと思い始めたのがフリーチベット、長野のオリンピックの時の聖火リレーでどなたか中国に対して反対をするというか、チベットの虐殺とか弾圧をやめろとかいうことから始まるので。（その時）あたしは、ボランティアですかね。気功をやったんで、それと一緒にボランティアをやっているような団体でしたので。たまたまそういうボランティアの活動から、ボランティアの活動は台湾で地震があったときに、ずっ

と前にあったのが募金活動したりとか。高砂族のおじいちゃんたちを日本に呼んだりするような活動に、お手伝いに行ったりとか。そういうボランティアと一緒にやっている団体なので、そういうことの手伝いをしていました。それがあって、じゃあ行ってみようというところから入って、こちら（排外主義運動）ともまったくもって（関係ない）。不思議ですよ、そういう意味では。最終的に、私も真ん中に入ってみんな同じ志のが集まった。それから何もしないんですよ、その時は。それが4月——3年くらい前ですかね——だったんですけど。4年か。

で、行ってみたらここは日本じゃないと思った。きっと、あの人たちが押しかけてきたらここは中国——いえない雰囲気ありますよね。何ともいえないね。日本じゃなかったですね。空気が違うんですよ。うまくいえないな。しっくりこない、何となく据わりの悪い感じの空気なんです。攻撃的なね。

それぐらいから日本やばい、まずいかな、隣にああいう大きな国があって。実際に（長野に）行って見えましたけど、その時に。あれは日本じゃないですね。長野、あの瞬間は日本ではありませんでした。聖火リレーの走る日に——長野を走る時に行きました。チベットを弾圧する中国を許さないぞ、というフリーチベット、チベット人を解放してそういう差別をなくさせろ、どちらかという人権的な感じですね。そちらの方から入って。いつてみた時に、本当に日本のはずなんですけど、空気が違うんですよ、やっぱり。ものすごいでっかい五星紅旗を上げた、上げたのがごっそりいるんですよ。で、ぎゃーぎゃー騒いでいるし。それであの人たちが中国語でいうんですね。すごい やばい。圧倒されました。これ日本人このままだったら飲み込まれるなという感じを受けて。これはやばい。しっかりしようよって思いました。そういう感じ。そこらへんくらいからが、活動として入り込んだ最初ですね。

そちらのことから入って結局その時に、このままだとこの優しくてゆるい危機感も何もない日本人は隣の国に、がつつした中国人に呑まれるな、これは本当にやばいなって。大事な国をね、文化も伝統もすべてですよ。あの人たちは、そういうものに対しては興味がないでしょうから。そういうものを守っていくのが日本人しかいない、根本としては

わからないだろうな。というのは、中国語、言葉がどうか、はっきりはしないけれど、言葉の作り自体は英語と変わらないじゃないですか。ああいう風なもの考え方なんですね。脳の構造もそうです。聞いたことがあるんですね。ポリネシアの言葉と日本語がよく似ているとか、ポリネシアの人だったか、ノイズとか聞ける民族というのは要するにそれは言語の体系で覚えて。言語の体系によってそれをどういう風に聞くか、聞けるかということらしいので。いくら日本人の顔をしていたって、小さい頃から英語をしゃべっていたりしてきたのは、その脳にならないっていうかという風に聞いたことがあったんで。ああなるほど、これは持って行けるのはちゃんとわかっている。私自身もわかってないんですけど、ちょっとでも知りたい、知ろう、大事にしようと思っている私たちには、何とかして残して次のために後世じゃないや、次の人たちのために残していくように守っていかなくちゃならないと思っている気持ちがなんかもう、焦りになって。

あとはだって、へんな話ノンポリの人たちは「あ、別にいいんじゃない」。中国人が来るよ、参政権で日本人じゃない人たちがいっぱい日本人になっちゃえばいいんじゃないか、目の前の生活困らねえしという感覚に、そういう人たちだけでは困るんですよ。伝統文化があって、今のこの日本という存在、この得がたい文化があって支えられている私たちであることにやはり気がついていない。それはでも、説明してもわからないのかなあと思ったりするけど、これを守れる人たちだけでも守っていかなければ。そういうのに任していたら、本当に飲み込まれていくというか、グローバルスタンダードだと何か言って、今も秋入学にしましょうなんて言ってますけど、ああいうことで日本人らしさ、ちょっと違うところってあるんじゃないかと思っていて。そのちょっと違う部分をも全部おしなべて、平地にしちゃうような感じがあるんですね。それはもったいないという私の感覚。私は朝鮮人が嫌いとか移民が嫌いとかそういうつもりでは全然なくて、守らなければならないものは守らなければいけないという感覚の方が、

私にとっては正しいというか。そちらのほうが主ですね、どちらかという。まあ、他の方とはちょっと違うかもしれませんが。でも本当は、もしかしたら、守ろうというもの自体は同じなので、どういう発想をしようが同じだと思うんですけど。

7. 排外主義との接点

大事にしなければならない伝統を守ろうとか、日本のいいところを大事にしたいという気持ちはずっと、それは。それを内に向かって守っていく、その時にみたいに外に向かって発することは、まったくやってなかったんです。外に出すようなプロテスト（をしないと）いけないと思ってたけど、出せなかったんですけど。それで（長野以降）しばらくは何もしないんですよ。結局ね、（同じ年の）11月だか頃に国籍法を変えましょうという、あのときに、たまたまそれも別の、気功ではない別の会に、ブログとかでいろいろやるのを見てたので、それで誘われて。何とかっていうブログを書いたんです²。団体を作って、11月に行きますって。それじゃちょっと行ってみよう。大変なことになっているので。それに抗議に行きましょうって。何それ？という感じですよ。こんなことがあるんだってすぐに法律がそうやってどんどん変えられていっているんだ。で、びっくりなんです。人権擁護法案だったりとか、外国人参政権の話とかいろいろ出てきていることを知るわけですよ。知り始めるようになって、なんじゃこりゃ？

でもそれって（情報源が）どこからだかわからないですよ。私もちょっとあまり記憶がないですね。情報をどうやって仕入れていいかわからなかったんで。何かで身についたんでしょうね。そのブログはちょこちょこ見えて。こちら（在特会）には、まったく他の方は動画見てきましたという人が多いと思うんですけど、私はまったく動画なんか知らなかったんです。（動画が）あるって。で、それ（上記の集会）に出た時に、後で縁というかね、ニコニコ動画と Youtube とかが、何それ？って話したんです。そこから見始めて、「へー、そんな人があるんだ」とかいう感じですよ。だからむしろ、後付け

² 保守運動家のブログだが、X氏本人の希望で名前は伏せてある。

なんですよ、私の場合は。他の方は反対の方が相当います。それと私は、おばちゃんたちみたいな、年寄りみたいにまず何かに行って、そこで初めて知って。（ネットは）見てただけど、何も見てなかったんですよ。そういうのがあるって知らなかった、使い方わからなかったんですね、結局ね。とっても惜しいことをしました。

（在特会に引き合わせたのは）その時に来た黒田大輔の話なんだけど、だから言いたくないんですよ。彼が何とかという会を作ってるんですけど、そこに関心を持ったりとか行き始めると、それにつけいる何かこういう方たちに会う。それは何なんだという風になって、ああ在特会ってそういうのがあるんだ、じゃあメール会員になろう。まずそういう流れで、絶対にこれに行くのだというのでもなく、皆さんに知り合いになって、というような感じが多分あれですね。最初の（抗議）に行って、その後、黒田大輔、日護会に行くようになって、それと他のいろんな名前もの、瀬戸さんもそうだし、在特会も桜井さんもそうだし。そんな感じじゃないかな。みんな渾然一体としてやっていたので。同じ。趣旨が違うと思ってなかったの、何かあるよっていったら、わーっと行く行く、という感じ。これじゃなきゃいやとかなかったんですよ。それはそれでいいかどうかは別として。

（在特会に入ったのは）いつ頃だったかね。

（会員番号は）5000番くらい。今でも基本的には、それこそメール会員なんで、何かをしなきゃという団体ではないんで。何かあつて行ける時は行く、他の（団体）も行ける時は行く。今でもそのスタンスは基本的には変わってないです。ただ、在特会に関してはもうちょっと関わろうと思っていて、行ける時に関してはお手伝いしようと思っていて。

8. 活動を持続させる動機

当初はもしかしたら（驚きが）あつたかもしれませんが、今は違和感ないですよ。最初はデモにしても街宣にしても、「叩き出せー」とかああいう過激な言葉は非常に抵抗があつたのを覚えています。出て行けとか言っちゃいけないんじゃないとか、思った記憶がありますね。

それが抵抗なく、むしろひどい言葉を吐いているのはお前だろというくらいひどいので、ちょっとなかなかね、ありますよね。そこら辺は良くも悪くも慣れていく。

大事なことがあるじゃないですか。日本を守らなきゃいけないよね、という。そういうと大げさになってしまうので、そういう表現はどうかと思うのですが。あまりにも世の人が無関心すぎて。日本は変わっちゃっていいんですという人はいいんですよ。良くないんです。変えられないという人たちです、私たちは。そうじゃなく、自分の生活さえなんとかなればどうでもいいんじゃない？というような、ノンポリの人たちの考えがあまりに大きすぎる。それをあまりに作りすぎた感じの日教組、許せないところがありますね。教育は非常に大きいので、私たちがどれだけなんていうか、よくここまで（右に）振れてきたなという感じがあるんですね。平和とか言ってきたのが、よく振れたのが自分でびっくりするくらいなんですけど。

何かないことには、衝撃がないことには、こっちに来れないんですよ。それに今、目の前に何かが起こるわけじゃないですか³。だから危機感もないしね。だから教育できちっと教えてあげなきゃいけないことも、きちっとやってくれないので、それをちょっとでも伝えたいという気持ちはありますね。だからって、何が変わるとか、そういうのがないがゆえに焦燥感があるんですね。焦りもね。行政に行ってね、何かやってと言っても、市役所に行って、抗議に行つたってのらりくらりで。今の民主党政権だと、わいわいわいわい私たちは焦ってるけど、するするいろんな意味がわからない法案なりが、頭の上を通り過ぎるようにしてできあがってますよね。でもやらないわけにはいかんですよ。黙って嫌がるわけにはいかんです。できる限りのことはやって。しなきゃいけないというようなことがありますかね、やっぱり。とりあえずやれること、何がいいのかわからないので。

教育の現場にも行かないといけないと思つているので。教育に関わりたくないという気持ちがあつたりしてますよ。教育を変えないことにはちょっと変わりようがないですよ。日の丸君が代いやでしょ

³ 起こるわけではない、の意。

うがないのがね、学校の先生やりたい、歌も歌わない、俺の自由だって。アホか、おまえが教えなければいけないのを、それを強制という言い方で。

(教育と在特会は関係ない) けど、在特会はどこかで——文科省は考えてないでしょう。確かに在日特権で云々というんだけど、私はそういう風に今のところのアクションをすることが大事だと思ってるんで。だから言ってるんですけど、日本人ですよ、それ以上のものないの。

(活動は) 楽しかったんですよ。みんなが集まってわいわいやって、いろいろな人の話を聞けるじゃないですか。終わった後に、お疲れ様ってやった時に懇親会でいろんな人の話、何でそんなことやってるんですかということも含めて、初めてだからいろいろ聞くわけですよ。知らないおじさんお婆さん、お兄ちゃんお姉ちゃんに。いろいろな人がいろいろな思いでやってきて、その空間が……。会社では言わないようなことじゃないですか。外国人参政権の何とかね。政治家は何なんだとか。テレビはちっとも面白くないとかね。ここ来たらみんなで話ができる、共有ができる。それが楽しい。お疲れ様という今日はよかったね、下らないことでも。総括っていうのかなんて言うんだらう。デモとかだったら、あそここのところはこうだったねというのもあるし。ああよかったねとか、人数少なかったねとか多かったねとか、みんなで何かを共有して確認しあう。サークルとつながってきすよね。

共有できる。それによって広がりが出るじゃないですか。それによってしがらみができて、なかなか活動にはつながっていないけど、自分が今度どうしようと思った時に、行動してみようとか。今いくつか考えているのがあるんですけど、共有できる。1人で悶々と閉塞感に苛まれて、このままじゃ日本はだめじゃないかというよりは、こうしたらどうだろうああしたらどうだろうと。与太話でもないし、人間語れるだけでもないし、そんな部分も含めて気持ちが強くなって——「終わらないな、まだ」という。1人だと気持ちが萎えたりしてしまうので、ああいいやとくじけてしまうところが、「もうちよっ

とがんばろう」とお互いが支え合う感覚ですよ。

それ(連帯感)はもちろんありますよ。向こう(気功団体)でもね、それは。共有できるものってというのは、ある種の限られた空間と限られた人数でしかできないものはあるので、向こうでもありますよ。飲み会ついているから楽しい、(気功では)何か別に(社交的なものが)ないというわけではないけど、その場でのがメインになることが多いですね。あとはそれぞれ個々でがんばるといいますか。ただ、みんななんでもそうなんですけど、サークル活動みたいなものは、何でもいいです。在特会でも気功でも合唱でも、サークル活動ってあるじゃないですか。何でも共有できる、小さなコミュニティの中で共有できる人たちと、気の置けない仲間と時間を共有できるのは楽しいですよ。癒やされますよね。本当に。浮世を忘れることも含めて。仕事できつきつしたりするじゃないですか。それを忘れるわけじゃないけど、それ以外に気持ちを抜かれるっていの？仲間と語り合う時間も含めて。飲む時間も含めてね。いろんなそうやってやる中で、いろんなアイデアを出して次に進む、お互いに励まし合う、支え合うこと、それは大きいですね。

9 結語に代えて

X氏について指摘できるのは、彼女が通っていた自己啓発の団体と『戦争論』が語りに及ぼす影響の強さである。小林よしのりの「公と個」は、公＝国とアプリアリに想定する点でそもそも社会科学的な概念たり得ていないが、ちっぽけな自分であっても公＝国家に対する献身が必要である、という論が随所にみられる。これは、自己啓発団体の保守的な世界観、およびビルドゥングロマン的なストーリー設定によって補強されている。

彼女の語る限りにおいて、これは市役所職員だった父親をはじめとする家族の影響ではない。むしろ「金持ちのため」の政治をする自民党を支持しない父親の影響が、「平和教材」を熱心に読んだり、労働組合でも役割を果たそうとするところに現れている。それが自己啓発団体に通うようになり、違和感となって仕事まで辞めてしまう。その意味で、自己啓発に通わなければ労組の専従から会社に戻っても、父親に類似した価値観を持ち続けていたかもしれない。ただし、これは定かではないが彼女自身

がそれに息苦しさを覚えたからこそ、自己啓発団体に通うようになったのだともいえるだろう。

これまで、両親との関係は活動家の政治的社会的化にとって決定的に重要とされてきた

(Demerath III, Marwell and Aiken 1971; Keniston 1968)。これは、西欧における極右活動家の研究でも指摘されており、活動家のなかには極右的な両親のもとで育った者が多いという (Klandermans and Mayer 2006)。排外主義運動の活動家にも家族の影響について言及する者はいたが、それは先行研究が示唆するより少数であり、しかも両親よりは（保守的な）祖父母に言及する頻度の方が高かった。両親から、保守的・排外的な態度を引き継ぐ例が少ないだけでない。聞き取り中に水を向けても、親の影響はない、政治の話はまったくしないといった答えしか返ってこないのがほとんどだった

それに対して X 氏は、それほどドラマチックではないが、リベラルな両親に反発するようなエディプスの反抗 (Keniston 1960=1977: 304) として右旋回したともいえる（こうしたケースは一例のみであった）。彼女の場合、葛藤を抱え続けるのではなく、自己啓発団体に参加してそれを本人なりに解消し、そこで生じた別種の葛藤も労組を辞めることで解決している。これにより職業生活と私生活の矛盾は解消されたが、それでも職場で話せないことを在特会の懇親会で話すという形で充足させている。その意味で、彼女は常に表局域と裏局域にある種の乖離があり、それが行動の原動力になってきたともいえるだろう。

文献

Demerath III, N. J., Gerald Marwell and Michael T. Aiken, 1971, *Dynamics of Idealism*, San Francisco: Jossey-Bass.

樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)~(7)」『徳島大学社会科学研究』25号.

———, 2012b, 「在特会の論理(8)~(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.

———, 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)~(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.

———, 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪

経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.

———, 2012e, 「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.

———, 2012f, 「排外主義運動のミクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.

———, 2012g, 「在特会の論理(11)~(14)」『徳島大学地域科学研究』2号.

———, 2012h, 「『行動する保守』の論理(5)~(6)」『徳島大学地域科学研究』2号.

———, 2012i, 「在特会の論理(15)~(18)」『徳島大学社会科学研究』26号.

———, 2013a, 「『行動する保守』の論理(7)」『アジア太平洋研究センター年報』9号.

———, 2013b, 「『行動する保守』の論理(8)」『茨城大学地域総合研究所年報』46号.

———, 2014, 『日本型排外主義』名古屋大学出版会.

Keniston, Kenneth, 1968, *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, Harcourt, Brace & World. (=1973, 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ』みすず書房.)

———, 1971, *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition*, Harcourt Brace Jovanovich. (=1977, 高田昭彦他訳『青年の異議申し立て』東京創元社.)

Klandermans, Bert and Nonna Mayer, 2006a, "Right-Wing Extremism as a Social Movement," Bert Klandermans and Nonna Mayer eds., 2006, *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。